AROUND THE WORLD 32

英語から見たタイ語 [2]

峰岸真琴　Minegishi Makoto（東京外国語大学）

タイ語の発音

東北タイでのローイクラトン（灯籠流し）のお祭りの様子

タイ語学習の最初の関門は発音である。正確な発音を最初に身につけておかないと，後で矯正することは難しいし，そもそもきちんと発音できない音は聞き取れない。またタイ人の英語の発音の癖を知っておくと，少しは聞き取りやすくなるかもしれない。

子音を C で，母音を V で表すと，タイ語の音節は，C1（C2）V（C3）と表すことができる。ここの丸かっこは選択的，つまり必須の要素ではないことを示す。注意すべきは，C1-C2 の組合せには 12 種類しかないこと（k-r, kh-r, k-w, kh-w, k-l, kh-l, p-r, ph-r, p-l, ph-l, t-r, th-r），音節末に子音がある場合でも子音は 1 つ（C3）しか許されないこと，しかも C3 になれる子音は極めて限られていること（-m, -n, -ŋ, -p, -t, -k, -ʔ）である。（最後の [ʔ] は「アッ」と驚く場合のような声門閉鎖音である。）タイ語の子音には，英語や日本語のような有声・無声に加え，中国語に見られるような無気･有気の対立がある。例えば /d, t, th/ の 3 つが意味の区別に用いられるのである。この無気･有気の対立のうち，特に無声無気音 /p, t, k/ は難しそうだが，実は習うにはコツがある。

英語では speak, steak, scar のように s に続く p, t, k は無気音に近く，peak, take, car のように，語頭の p, t, k は /ph, th, kh/ という有気音で発音されている。日本人が外来語としてこれらを発音する場合も同様である。前者の発音を意識化することで，語頭の無気音の発音が習得しやすくなるので，口に出して試してみていただきたい。

どの言語にも音節を構成する際の共起制限が存在する。英語は音節初頭に子音連続 [s-l] は許すが [s-r] は許されない。このような音節構成上の制限は，外国語を学ぶ際に影響を及ぼすことが多い。それではタイ人が英語を話すとどうなるだろうか。

私自身の経験だが，タイのホテルのフロントで /wan din/ と言われて当惑したことがある。タイ語では /wan/ は「日」，/din/ は「土，泥」であり，修飾語は名詞の後ろに置かれるので，これがタイ語だとすると「泥の日」となり，理解できない。実は “one drink”，つまりウェルカムドリンクのサービスがある，と英語で言われたのだった。/wan/ が “one” に当たるのはわかるが，タイ語に音節初頭の /d-r/ がないために，“drink” の “r” が落ち，音節末には子音が 1 つしか許されないため，“k” も落ちてしまった，というわけである。

表紙写真について

THE PROVO PIONEER VILLAGE

杉本　薫　Sugimoto Kaoru（東京都立両国高等学校附属中学校）

7 月 24 日は「パイオニア・デイ（Pioneer Day）」と呼ばれ，アメリカのユタ州の人々にとって最も大切な祝日である。未開の地だったユタ州に，ブリガム・ヤングに率いられた開拓者の一団が，現在のソルトレイク市近郊にたどり着いた日を記念している。

写真のユタ州プロボ市にある “The Pioneer Village” では，公園ほどの敷地に開拓者たちが実際に生活していた家や学校，店，牛舎，馬屋，鍛冶屋や大工などの建物をそのまま移築し，当時の生活をそのままに再現している。ガイドをしてくれる村人役はすべてボランティアで，服装やひげも当時のままに，訪れる人たちを映画やドラマのような世界にタイムスリップさせる。雰囲気としては，「大草原の小さな家」あたりを思い出すとちょうどいいかもしれない。このように開拓者の生活を残し，後世に伝えようという施策はアメリカに多い。

一教室しかない学校では，カモメがユタ州の鳥である理由を説明していた。確かに海のないユタ州でカモメとは不思議な取り合わせである。

その昔，開拓者たちが定住を目指して，作物など何も育ちそうもない荒れ地を何とか開墾して，やっと小麦の収穫にたどり着いた時に，突然現れたイナゴの大群が彼らの畑を襲い，貴重な小麦を食い荒らしてしまう。なすすべもなく絶望していた開拓者たちを救ったのは，どこからともなく現れたカモメたちで，イナゴをことごとく食べ尽くしてくれたという。開拓者たちにとってこれはまさに天の助けで，そのエピソードから海のないユタ州でカモメが州の鳥として大切に扱われているそうだ。